

# ラングレ＝デュフレノワと『ヘルメス哲学史』（1742）

——アイロニーが生んだ「阿呆の画廊」とその哲学史史的意義——

寺田元一

## はじめに

ラングレの『ヘルメス哲学史』は、現代の主要な哲学史の歴史家たち全員に無視されている。ブラウン、ゲルー、サンチネッロみなしかりである。<sup>1</sup>そして、一見すると、確かにこの『哲学史』は無視されても仕方のないものである。後に見るように、この著作は単なる錬金術師の物語群であり、物語としても乱雑で矛盾しており完成度が低いからである。だから、これをそのまま取り上げて分析しても否定的な評価しか出てこない。

しかし、そうはいつでも、この『哲学史』は、いくつかモノグラフが書かれる人物、ラングレ＝デュフレノワの著作であり、彼が最年長のアンシクロペディストであることも考えると、18世紀フランスの哲学史の歴史を論じるに当たって、言及せずには済ますわけには行かないように思われる。しかも、ラングレは歴史学の方面で近代的な方向への方法論の転回に寄与したとされるだけに、ますますその『哲学史』は無視できなくなる。さらに、この『哲学史』がもっと大きな一般的哲学史の一部として構想され、その「先触れ」として出版されたことを考えると、<sup>2</sup>この著作がなぜかくも不出来に終わったのか、そして、なぜ一般的哲学史は出版されなかったのかを、どうしても検討する必要に迫られることになる。

そこで、本稿では、名だたる哲学史史家が無視した『ヘルメス哲学史』を敢然と取り上げてその内容紹介を行う。と同時に、それに哲学史史上の歴史的な位置づけを与えたい。そして、それを通じて、「阿呆の画廊」としてヘーゲルによって切り捨てられ、その後も顧みられることのないブルッカー以前の哲学史に新たな光を当てることで、ヘーゲルの哲学史の歴史の見方の悟性を批判し、それを克服する方向性を示したい。

なお、ラングレについて日本ではほとんど知られていないので、最初に、長くなるが、彼の生涯と業績をシェリダンにしたがって紹介することにする。<sup>3</sup>ルイ14世の世紀から『百科全書』の啓蒙盛期までヨーロッパ精神の転換の中を生き、転換の傷を自己の精神に負わざるを得なかった、スキャンダラスなマルチ文士・寄食者の姿をわれわれは目にすることが出来るだろう。こうした生き様が彼の『哲学史』にも色濃く陰を落としていると思えるだけに、なおさら、この紹介は重要な意味を有する。

## ラングレの生涯と仕事

シェリダンによれば、従来ボーヴェー生まれとされてきたのは誤りで、ニコラ・ラングレ＝デュフレノワは、パリで1674年に、ボーヴェーの鬘屋の息子として生まれた。デュフレノワというのは、どうやらニコラが貴族らしく装うために勝手に付け足した呼称であるようだ。この時代によ

く見られたように、ラングレもまた、官職を買って、上層ブルジョアから法服貴族へと上昇していった階層に属する。妹や弟がいたが、弟のうち一人のジャックはスパイ活動に従事していただけでなく、錬金術にも凝っており、『ヘルメス哲学史』で14オンスの水銀を金に変えたということ で言及されている。こうした方面への関心はニコラも共有していた。

ラングレはボーヴェーのコレージュで人文諸科を学び、ジャンセニズムをめぐる論争に影響され、それにシンパシーを抱くことになる。また、論争家ならびにビラの書き手としての才能を開花させた。94年にソルボンヌのコレージュに入り、神学士となるべく七年間の課程に進む。しばしばボシュエの家に足を運び、彼から歴史や哲学への薫陶を受ける。95年に、スペインのアグレダの修道女、マリア・コロネルの『処女マリアの生涯』の仏訳が出版されると、その狂信的神秘主義をカトリックの教義に反するものとして糾弾する激烈な文書を書き、話題となった。そこには、スピノザやリシャール・シモン、ピエール・ベールに見られるような、超自然的なものに対する合理的で懐疑的な批評意識が息づいている。これが元でラングレは一時逮捕されるが、まもなく釈放され、神学の研究を継続するとともに、ソルボンヌの本屋に出入りして書誌学的知識を深めていく。96年にオラトリオ会のサン・マグローワール神学校に登録され15ヶ月過ごす。97年にマリア・コロネルを批判する『幽霊、幻、個別的啓示について歴史的・教義的に論ずる』を書き、聖書以後に現れた奇跡や啓示に対し合理主義的な批判を展開した。その後は、読者の要求の変化に対応して、『イエス・キリストに倣いて』(1700)や『イエス・キリストの新約聖書』(1703)、『ローマの日中聖務日課書』(1705)を出版する。1705年に神学士号を九番目の成績で獲得。こうした学生時代の旺盛な著作活動で、ラングレは、神学者ならびに聖書批評学者としてその世界で認められていった。

卒業後、安定した聖職を求めながら、食い扶持として、スペイン継承戦争など戦争に便乗した職務—ビラの書き手、スパイ、情報屋など—に従事する。1707年にはオランダに行き、そこでの宗教の多様さに感動する。熱狂派やクエーカー教徒などの実態に触れる中で、比較宗教的視点も獲得していく。また、プロテスタントの学者バナージュの批評の厳格さに影響を受けるとともに、彼を通じて亡くなったばかりのベールからできるかぎり多くを吸収しようとする。他方で、ジャンセニストのケネルの仲間と接触し、その影響下に、『告白の秘密の不可侵を歴史的教義的に論ず』(1708)を出版する。10年にトゥルネーの司教座聖堂参事会員の職に就こうとするが失敗し、これが奇縁となって、ジャンセニストとも気まずい関係となる。14年にもリルで聖職に就こうと試みるがやはり失敗。他方で、彼のオランダ派遣がそもそも同盟軍支配のオランダやフランドルで情報収集することにあつたように、ラングレはフランスのスパイとして暗躍している。1709年からは同盟軍側にも雇われて、二重スパイとして働く。このとき、サヴォワのオイゲン公と親しくなり、彼の集書の相談役となる。こうした関係が元で、フランス政府の失寵を買い、12年に国外追放の憂き目にあう。

他方で、オランダ、ベルギー滞在は彼に書店と接触する機会を提供し、彼はますます書誌学的知識を深めていったばかりか、自ら稀覯書の売買に乗り出し、詐欺まがいの行為で不評を買って

もいた。著作・編集活動にも熱心で、1713年に『歴史学研究の方法』を出版した。これは後にいくつもの版が改訂増補されて出版され、彼の著作のうちでもっとも読まれた書物となっていく。その方法の特徴は、博識と批評的アプローチとユマニズムとの総合にある。こうした点については後で別に節を設けて考察したい。15年に追放を赦されてパリに戻ることになるが、その後は彼に常に二心者というレッテルがつきまとうことになる。

15年はちょうどルイ14世が死んでオルレアン公の摂政時代に替わった年でもあった。ラングレは摂政の戦争顧問のクロード・ルブランと関係を深め、彼の下で働くようになる。スパイや情報屋としての仕事と同時に、彼の蔵書の収集と管理もラングレの仕事の一つとなる。そこで、ヴォルテールと親しく接するようになったばかりか、ブーランヴィリエやフレレといった碑文アカデミーの自由思想的傾向の強いグループとも接触したと思われる。こうして、ブーランヴィリエの手稿を読む機会を得たばかりか、後には、自らそれを編集して出版することにもなる。13年に教皇庁よりユニゲントゥス憲章が発せられてジャンセニズムに異端が宣告されたが、ちょうどラングレの帰国の頃から、ジャンセニズムをめぐる争いは教皇の無謬性や教皇とガリカン教会との関係をめぐる神学的論争へと転回してきていた。神学者ならびに歴史家として、ラングレもまたこの論争の渦中に自然と巻き込まれていく。のみならず、摂政と高等法院のジャンセニストの間で18年に深刻な対立が生じると、ラングレは後者の側に立った仲介活動を行い、そのために摂政ならびにルブランの失寵を買い、いわばスケープゴートとしてバスターニュに送られることになる。

この期間の著作・編集活動は低調で、16年に『地理学研究の方法』を出す。これは本体をマルチノー・デュ・プレシの『新地理学』から無断借用しており、盗作・改竄騒ぎを起こした。また、ポール・ピニョンがローに売り、ローの逃亡後にデュボワ師に渡った蔵書のうち、重要なものが多数盗まれるという事件が20年に起きたが、どうやらこの盗みにラングレは首謀者として関与したらしい。

発覚ならびに逮捕の恐れもあって、ラングレは21年にフランスを発ってウィーンに出向いた。ただし、主要な理由はむしろ、オイゲン公にトゥルネーの司教座聖堂参事会員への就職の後押しを依頼することにあった。ただ、このときはちょうど、デュボワとジャンセニスト・高等法院グループとの確執が激しくなっていたときで、ラングレはジャンセニスト・グループの密使としてウィーンに赴いたのではないかとデュボワから疑われていた。ルイ15世の重病の安否が気遣われるなどと不用意に発言したことなどから、ますますラングレの陰謀荷担の疑いは強まっていた。ウィーンでラングレは詩人ジャン＝バチスト・ルソーと親しくなり、いっしょにオランダに行く約束をしたが、急遽ルソーが同行を取りやめ、彼は一人でオランダへ赴いて、その途中ストラズブルでフランスの官憲に逮捕されてしまう(1722)。逮捕時の尋問からこの逮捕にルソーからデュボワに渡った情報が関わっていることを知って、ラングレは終生ルソーに恨みを抱くようになる。

1724年にパリに戻ったラングレを待っていたのは、彼の庇護者ルブランが犯したとされる殺人の嫌疑で、それに連座する形で、ラングレもまた逮捕されて今度はヴァンセンヌに送られてしま

う。その後、ルブランの名誉回復がなるが、ラングレは結局二年間も収監されることになる。ヴォルテールの尽力もあってやっと釈放されると、再びルブランの下で働く。こうした彼の浮き沈みの人生には、絶えず経済的不安にさらされながら、パトロンの下で、法的にも道徳的にもかなり問題のある職務に従事する一方で、読者の動向に合わせて安直な文筆・編集活動に携わる、当時の文士の一般的な姿が反映されている。

しかし、1726年にルブランが死ぬと、彼はいくつかの年金を得つつも、主として文筆で身を立てるようになり、次々と著書や編著を発表していくことになる。とりわけ重要なのが、29年に出版される『歴史学研究の方法』の改訂新版であり、そこには、ブーランヴィリエの手稿『世界史綱要』から断りなく借用された世界史が改変されて付されている。イエズス会系の『トレヴー誌』は、奇跡に常に自然な原因を想定しようとする姿勢をそこに読み取って非難した。こうして、ラングレに「不信仰」・「スピノザ主義」といったレッテルが貼られていく。40年にはさらに『歴史学研究の方法』の『補遺』が出版される。1730年代に彼は、出版が比較的自由なオランダに眼を向け、31年にハーグで『クレマン・マロ著作集』を編集出版する。ここには、17世紀の規則尽くめの文学に替わって、中世・ルネサンスのエネルギッシュで放恣なフランス文学を評価しようとする当時の動向が反映されている。この著作でスキュンダラスだったのは、ラングレが付した「クレマン・マロ著作集の歴史的序書き」で、その自由さ、風刺、放縦なタッチが話題となった。そこにはディドロの『ラモーの甥』を髣髴とさせるような、寄食者意識の自虐的な暴露すら見られる。ラングレの紹介もあってマロは18世紀に大衆性を獲得していった。その他に彼は、『愛の定め』(1732)、『風刺の書斎』(1733)などの詩集を編集し、また、『成り上がり的手段』(1732)というリベルタンのコント集も編集して、すべてオランダで出版した。そうした活動の頂点にラングレ編の『薔薇物語』(1734)が位置するが、それは校訂版といえるような代物ではなく、1500年版の引き写しにすぎない。しかし、書評誌の扱いはおおむね好意的であり、当時まだ厳密な校訂への要求が弱かったことがうかがえる。

32年は、泥沼化するルソーとの闘いが本格化する年でもある。それは、31年に、ラングレが自ら編集した『ルソー著作選』に、ルソーの友人名で、「盗作」、「恩知らず」、「男色」と、ルソーを罵倒するような「献辞」を追加したことから始まる。これに怒ったルソーとその友人たちは、出版差し止めを提訴しそれを勝ち取る。が、これに懲りずにラングレは、さらなるルソー攻撃を『小説の用途について』(1734)で展開する。ルソーにイエズス会士を始め多くの人が味方し、ラングレは悪質な売文家という汚名を着るようになる。

なお、この時期の編著で忘れてはならないのが、『スピノザの誤謬の反駁』(1731)である。『反駁』と銘打ってはいるが、フェヌロンによる「反駁」はほんの10ページほどで、主要部分は、ブーランヴィリエの「スピノザ試論」が占めており、そこにはむしろスピノザの影響が刻まれている。ラングレ自身スピノザに共感を抱いており、また、ブーランヴィリエを尊敬していたから、この著作は成立したのだが、同時にそこには、売れ筋を読む売文家の眼が光っていた。こうして、ラングレはフランスにおけるスピノザの通俗的な普及に貢献することになる。『反駁』には、リュ

カとコレリユスによるスピノザの伝記を合成した「スピノザの生涯」、さらには、イサーク・オロビオによる「ヨハネス・ブレーデンプルクに対する哲学的闘争」も収められている。ブレーデンプルクはスピノザ主義的無神論者であり、オロビオは彼を批判するのであるが、その立場はスピノザとは異なるとはいえ、やはり自由思想の一種であり、そうした内容全体から『反駁』はスピノザ主義の著作とされ、宗教界から批判されることになる。しかし、その批判が逆にこの書物の普及を助けてしまう。

35年から39年にかけては、『歴史学研究の方法』(1735)、その『補遺』(1739)、『地理学研究の方法』(1736)が相次いで出版されている。『地理学研究の方法』の第一巻は『子供の地理』と題され、コレージュでの教育用に編集されて好評を博した。その姉妹版として、『若者の教育のための歴史の要諦』(1736-39)全六巻も出版され、これも多くの書評誌で高評を得た。ただし、イエズス会系の『トレヴー誌』だけは批判的であった。

40年代もまたラングレにとって多産な時代で、40年にまずギヨーム・サルモン『化学哲学者文庫』の新版を出し、さらに42年には、その姉妹篇として『ヘルメス哲学史』を出版する。これらについては後に詳しく検討する。また、同じ42年に『地理学研究の方法』の新版を出し、そこに「大小旅行」と題された旅行記集成の試論を付して、旅行記集成への意欲を示したが、プレヴォー編『旅行記の全般的歴史』(1746)に先を越された。この時代の大きな仕事として、歴史書の王室検閲官スクースに協力して行った『コンデ公の覚書』の第六巻『補遺』(1743)の出版がある。ここには、ラングレが発見し整理した新資料が集められたが、それが王室の内幕を暴きかつ王室を批判するものだというので、一種見せしめ的に発禁処分となり、ラングレは68歳で六回目の収監の憂き目に遭った。それでも彼は、次に『アンリ三世の日記』(1744)を編集出版し、プロテスタントを擁護しカトリックの残虐を批判するノートを付した。また、やはりスクースと協力して『フィリップ・ド・コミーヌ閣下の覚書』の新版(1747)を出版した。このように、この時期は、70にならんとするラングレが、フランス史家として巷間からも高く評価される仕事を行った時期として注目に値する。

同時に、この時期はかつての著作の改訂版の出版と、それからの副産物の出版によって特徴づけられる時期でもある。43年には『世界史小年表』が出版され、かなり評判となるが、これは『歴史学研究の方法』の抜粋ともいえるものである。ただし、細部については間違いが多いということで批判もまた多く現れた。ラングレは『小年表』をパッションネイ枢機卿に捧げたが、こうしたバチカンとの結びつきを利用して、『イエス・キリストに倣いて』のラテン語新版を出し、それを教皇に献呈しようとした。しかし、それは結局出版されなかった。

それ以外の40年代の活動として、政治的プロパガンダとでもいうべき活動がある。この当時、イギリスやオランダではジャーナリズムが発達し、戦争には「ペンの戦争」というイデオロギー闘争が付き物となっていた。ラングレは『オランダ三部会の議事録から取られた興味深い秘密文書集』(1743)の第二版を装って、実際にはそれと無関係に、オランダ政府に宛てられたフランス宮廷の手紙や覚書をオランダで出版し、その中で、オランダ政府の旧要人に藉口して、オース

トリア継承戦争でのフランスの利害を代弁する主張を展開し、オランダ世論を親フランス的な方向に向けようとした。さらに、『ハンガリーの女王の公正さによって平和になったヨーロッパ』（1745）を出版し、女王マリア・テレジアへの献辞を装って彼女に残虐非道などといった最大限の悪罵を投げつけ、彼女が女帝になるのを阻止しようとした。同じ頃、ロンドンで（あるいはそう偽って）『イギリスのある大貴族の手紙』を出し、そこで今度はイギリスの読者に向けて（実際はフランス政府に向けて）、神聖ローマ皇帝の資格としてカトリックかどうかを挙げるのは根拠がなく、プロイセンのフリードリッヒも候補の一人だといった主張を展開していく。49年には『摂政時代の覚書』の再版を編集出版し、摂政時代の知られざる陰謀を暴くとともに摂政への賛辞を呈している。この著作は『摂政時代の歴史』の一部をなすべく準備されたが、後者は出版されないままに終わった。

50年代に入ると、『1750年の歴史暦』を出版し、そこで名誉革命以後王権を得たハノーバー朝ではなく、スチュワート朝を正統の王朝とする主張を展開して物議を醸す。フランスのイギリス大使が抗議してフランス政府はこの暦を出版禁止にし、ラングレも収監されて2ヶ月半後に釈放された。しかし、彼はこれに懲りずに、財務長官兼国璽尚書マジョーによる20分の1税の導入をめぐる争いに、マジョーの敵である聖職者層ならびにその庇護者ダルジャンソン伯の立場から首を突っ込む。ラングレは匿名でマジョーを罵倒する手紙を本人に宛てて書いたばかりか、それを国王にも提出すると脅すに及んで、マジョーは警察にこの手紙の筆者を調べさせ、筆跡から77歳のラングレが逮捕されるに至った（1751）。これは1ヶ月で釈放となるが、その後もまだ懲りずに、パリ大司教ポーモンとジャンセニスト・高等法院との争いに関わっていく（1754）。

さて、51年に『百科全書』の出版が始まるが、それに歩調を合わせてラングレもまた百科全書的著作群を出版する。『化学講義』全五巻（1751）—この初版は17世紀に出ているが、それに自身が行った実験を大幅に付け足して成立—。ついで、バルバ『冶金学』の仏訳新版（1751）。スペイン語原本の仏訳とロイヤル・ソサエティの『フィロソフィカル・トランザクション』の論文の仏訳からなるこの化学書には、亡命ジャコバイトのゴスフォードが協力している模様で、なかなか好評を博した。また、その図版は『百科全書』にも影響を与えた。同じ年に、1697年に書かれて出版されなかった『幽霊、幻、個別的啓示について歴史的・教義的に論ずる』も出版された。これはカルメが『幽霊論』（1746）を著したのに刺激されたもので、ラングレはここでも例によって、事実と神秘現象を峻別する基準を示していないと、カルメに咬みついている。カルメはカルメでラングレに超自然的なものを全面否定しようとする傾向を読み取り、彼を「リベルタン」・「自由思想家」扱いする。ところが、新世代のグリムにはこの著作はもはや時代遅れに映る。「歴史と宗教についてあれほど大胆に書いてきたラングレ・デュ・フレノワ師がしまいには信心家に成り下がった」と『文芸通信』で皮肉られてしまうのだ。

当初から『百科全書』に共感していたラングレは、プラード事件以後、ディドロの友人の若き神学者たちが『百科全書』から去っていく危機下、52年辺りからマレ師と協力して歴史関係の項目の執筆と見直しに従事していく。彼が関係したのは、近代史の用語や制度に関わる項目で、第

三巻に36、第四巻に18、第五巻に1寄稿している。第五巻は彼の死後出版された。彼には珍しく無償の協力であったが、『百科全書』の編者たちはこの過去の人をあまり評価せず、その文体の洗練のなさや彼の没論理・一貫性のなさを批判している。ここには、後に見るような世代差・時代差が反映している。

彼の死は55年に突然訪れるのだが、その直前に彼が精力を注いでいたのが、『フランス王政の全般的個別的歴史のプラン』で、その一部をなす予定だった『ジャンヌ・ダルクの物語』(1753)と『プラン』の第一部をなす三巻本(1753)が出版されている。前者は17世紀のリシェの『オルレアン処女の物語』を下敷きに、それに彼自身の二論考を加えたもので、そのリシェとの違いは、リシェがジャンヌを神から啓示を受けた人物としてその行動を解き明かしていくのに対し、ラングレがジャンヌの啓示を自己暗示と生理的条件によるものと合理的に解釈する点にある。彼はこの著作を書店組合の規制から自由に印刷・流通させようとしたが、法律の壁もあってうまく行かなかった。そこから、有志を募って組合とは別に「文芸会社」を起すことも企画するが、これも彼の死によって現実化しなかった。『プラン』第一部はフランス史の要約年表といったもので、表面的かつ不正確ということで評判は悪かった。この著作の中でラングレは自己のフランス近代史への貢献を吹聴し、それをネタに国王から年金を得ようと画策するが、失敗に終わった。1755年1月15日、ある本を読んでいて寝入ってしまったラングレは、火に顔をつっこんでやけどを負うという事故で不慮の死を遂げた。死んだ時彼はほとんど文無しだったが、そこには、年金付きの役職を持たないため、パトロンから種々の怪しい仕事を与えられてそれをこなすか、もしくは、自ら文士あるいは編者として売れ筋の本を粗製濫造していくかしてしか生活できなかった、彼の生涯につきまとった境遇が映し出されている。

## 歴史学方法論

『ヘルメス哲学史』の分析に進む前に、彼の業績のうちでもっとも評価される『歴史学研究の方法』を検討しておきたい。結論的にいえば、せっきくの歴史学方法論も『ヘルメス哲学史』の叙述に当たってはほとんど生かされなかったというのが実状であるが、その奇妙なズレを見ておくことが、ラングレならびにラングレの「哲学史」を考察する上で大いに役立つはずである。『歴史学研究の方法』には多くの版があるが、ここでは重要な改訂が施された1729年版に即して彼の歴史学方法論あるいは歴史観を検討したい。

その方法の特徴が、博識(érudition)と批評的アプローチとユマニズムとの総合にあることを、まず最初に再確認しておきたい。つまり、ベールの『歴史批評辞典』が打ち出したような批評的博識という方向性を、ラングレは継承している。そして、それを通じて、教訓的であった煮熟的な歴史ではなく、事実に即した歴史を「歴史ピロニスム」を打ち破って構築していこうとする。その際導きの糸となるのは、ベールやシモンら新しい批評家たちが定式化した規則である。そこには、セクストゥス・エンペイリコス以来の懐疑論の方法が批判的に継承されるとともに、デカルトの「明晰判明」という建設的な基準や経験論の規則も取り入れられている。<sup>4</sup> さらにラング

レには、歴史や批評を民衆のものにしようとする、啓蒙主義的な姿勢があり、そうした教育的な関心が方法論と切り離せないものとなっている。

具体的にテキストに即して考察することにしよう。29年版は歴史学方法論と、ブーランヴィリエの手稿『世界史綱要』を無断借用して構成した世界史、それに彼の得意とする歴史書関係の文献目録からなっている。歴史学方法論として初版から一貫しているのが、史料の検討と検証という姿勢であり、そこから、聖書を歴史の基準としながらも、教会の権威から自由に事実を事実として検討する姿勢も生じている。これが「自由思想」「不信仰」といったラングレ批判を生むことにもなる。

知ることは事物を原理から認識することである。したがって、歴史を知ることは歴史の素材を提供する人間を認識することであり、人間を健全に判断することである。歴史を研究することは人間の動機、見解、情念を研究し、人間のすべての発条、日頃の行い、常軌を逸した行為を深く知ることであり…一言でいえば、他者のうちに自分自身を認識することを学ぶことである。<sup>5</sup>

このようにラングレは、王侯や教会の側からではなく、民衆の側から歴史を事実即して原理的に認識しようとする。

そうした観点から、ラングレは、歴史学に入る前に、まず、地理学、習俗、年代誌を学ばねばならないと考える。「順序は、重大な知識をまずは必要としない非常に簡単な原理から始めて、つぎに、既知のものを必要とするような事物へといっそう容易に向かえるという風でなければならぬ」。<sup>6</sup> こうして、ラングレにおいて歴史は単なる物語ではなく、地理や習俗といった空間や文化についての具体的認識を前提とする総合的な時間知と考えられるに至る。

また、歴史上の奇跡に自然な原因を想定しようとする、若い頃から彼が有し、かつ、ブーランヴィリエによって強化された志向を、改訂版ではとうとう聖書にまで及ぼしていく。<sup>7</sup> こうして、ラングレが年表をものす時、聖書の記述を基準としながらも、それらは他の民族の歴史—例えば、中国—と結局並行関係に置かれ、聖史も各民族の俗史も世界史の同等の構成者として、年表のうちに自己の位置を得ることになる。<sup>8</sup> こうした傾向は当然、ラングレの仇敵であるイエズス会の側から、ラングレは常に奇跡に自然な原因を暗示しようとする努力していると批判されることになる。<sup>9</sup> さらには、1731年になると、『スピノザの誤謬の反駁』を編集出版したこともあって「スピノザ主義者」というありがたくないレッテルまで貼られてしまう。<sup>10</sup>

とはいっても、『若者の教育のための歴史の要諦』、『世界史小年表』など姉妹編とともに『歴史学研究の方法』はフランスのみでなくヨーロッパ的な規模で好評を博し、各国語訳も出た。その思想の危険性や、ラングレに付き物の性急さやケアレスミスはあるものの、批評的博識による歴史批評の流れは摂政時代以来の自由な雰囲気の中で、フレレなど碑文アカデミーの自由思想家の影響力もあって、フランスに根付きつつあったし、読書人の増加は歴史を民衆的なものにしようとする傾向を強めていた。ラングレの歴史関係書はこうした潮流に乗っていたのだ。

このように、彼の歴史学方法論は反宗教性、実証性、批判的合理性、民衆性、地理との連関な

どを特徴としており、それを〈啓蒙的〉と形容してもいいだろう。それは確かに、ヴォルテールやモンテスキューの歴史学方法論にも通じるものであるし、『百科全書』の主張にもつながるからである。<sup>11</sup>

### 『ヘルメス哲学史』

しかし、若きフィロゾーフたちにとってラングレはやはり過去の遺物だった。彼はフィロゾーフとして扱ってもらえなかったのだ。彼らはラングレに、権力者パトロンを馬鹿にしながらも彼らに寄生せざるを得ず、そのため状況に応じてカメレオンのように変身する「ラモーの甥」にも似たアイロニカルでニヒルな存在を見ていた。それはフィロゾーフのポジティブな志向と相容れなかった。フィロゾーフもやはり権力者を利用したが、それに寄生したり依存したりすることは避け、彼らは基本的には自己の信念を貫こうとした。それに対し、ラングレは、権力者の意向や読者の意向に左右され、それを満たすためには汚れたことをも平気で無節操さを有していた。彼には、小著『フィロゾーフ』が唱うような批判精神や徳すなわち理性、人間愛、社交性、公共性、自然主義が欠けていたのだ。<sup>12</sup>

そうした弱点と、ラングレにはどうしようもない客観的な世代差を露呈したのが、『ヘルメス哲学史』に他ならない。しかし、その問題の考察に進む前に、まずはこの著作全体を概観しておこう。それは、全三巻からなる。第一巻が「ヘルメス哲学史」、第二巻が「金属の変容 [錬金] の歴史」と「真のフィラレート [フィラレートはある錬金術師の仮名]」、第三巻は「ヘルメス主義の著作カタログ」である。

第一巻は「哲学史」となっているが、われわれが期待する哲学史は展開されない。ヘルメス哲学とは何かも曖昧であり、それがどのように成立し、どうした段階を経過してどのように展開したか、主題や視点、方法、社会的地位や役割はいかに変化したか、学派間の交流、衝突、影響はどうだったかなどは少しもわからない。語られるのは、自嘲気味にラングレ自身が述べる、ノアの子供から18世紀までの「多くの狂人とわずかの賢者」(I, 3)の物語、あるいは、「食欲に身を任せた人々が莫大な労力と甚大な損失にさらされたことで、摂理が食欲に課した罰を示す」(I, vi)物語である。<sup>13</sup> 偉人伝ではなく、いわば愚人伝、反面教師としての伝記なのだ。しかもそれは、事実即ちしたものであるというより、伝聞を元にラングレが想像力によって評伝と化した一種の教訓物語であり、そこかしこに彼の辛辣な批評が顔を出す。例えば、トレヴィーージのベルナルドゥスを取った第33節 (I, 233-240) では、「彼はヘルメス哲学において知られる最大の詐欺師、すなわちゲーベル [アラビアの錬金術師ジャービル・イブン・ハイヤーンのこと] を読み耽ったが、ゲーベルが読者に示す処方や実験の大多数には真実よりも無数に多くのうそが含まれている」とか「彼は人間にせよ、動物にせよ、その糞にまで飛びついた。あとは蒸留、循環、昇華だけだった。これらの方法はさらに12年を彼に費やさせ、費用も約六千エキュかかった。しかしながら、このお金がすべて薬品に使われたわけではない。その一部は彼がとりつかれた錬金術師の手に落ちた」などといった具合に。なお、459ページ以下には「ヘルメス哲学の有名な作家の

年代記」が掲げられるが、年代記が彼の十八番であることは既に見たとおりである。

第二巻は、フィラレートの多くの著作のうちの四作品を「真のフィラレート」として編集し、それに序文として「金属の変容〔錬金〕の歴史」を付けたものである。第一巻が主としてラングレ自身の作品であるのに対し、第二巻は彼の編集ものである。「前書き」には彼らしい傲慢さと校訂のいい加減さが現れており、今までの版が「すべて同様に誤りである」(II, xv) のに対し、この版は「原本と見なすべきで、かつ、極稀観本である1669年の英語版と一致している。そこから私は本質をなす補遺を引き出し、それらを、著者の精神に沿って、原文に苦もなく挿入した」(II, xvi) などと臆面もなく語り、さらには自分の仏訳のすばらしさを自画自賛する始末である。「英語版と一致している」といった矢先に、そこから「本質をなす補遺を引き出し」別の原文にそれを「挿入した」というのだから、結局、原典が何か曖昧であり、追加や削除をかなり恣意的に行ったと告白しているようなものである。<sup>14</sup> 「金属の変容の歴史」の方は、錬金に成功したとされる人物についてその事績を伝聞にしたがって語ったもので、第一巻の「ヘルメス哲学史」をあるテーマに沿って簡略化した歴史であるが、第一巻と多少トーンが異なって、錬金を事実であるかのように語っている点が注目される。扱われるのは、ヴィルヌーヴのアルノーからプロヴァンスのドリルまでであり、14から17世紀と時間的守備範囲は狭い。面白いのは、この錬金の歴史になぜか付加されたジョフロワ兄の「哲学者の石に関するトリックについて」と題する論文である。これは『王立科学アカデミーの報告集』から取られた1722年4月15日付の論文で、ジョフロワが「読者が自称化学哲学者に騙されることがないように、重立ったトリックを報告」したものである。<sup>15</sup> それは、読者に錬金の成功たんを語って聞かせた直後に、まるでそれに冷水を浴びせるように、マッチポンプ式に配列される。ここにも、ラングレのアイロニカルな意識が示されているが、この意識についての考察は後で行いたい。

第三巻は、ヘルメス哲学の文献目録で、多くの文献にラングレの短評が付されている。けなされている文献が多いが、レムリヤブルハーヴェなどは高く評価されている。文献目録は彼のもっとも得意な分野であるはずだが、これについては書評子の評判がよくない。というのも、著者のアルファベット順を標榜しながら、本来bに来るべきものがpに来ていたりといった、ラングレらしいケアレスミスがかなりあるからである。この点については彼自身気にしていたようで、パリの国立図書館に、この第三巻についてのみラングレが自筆で詳細に訂正を施した刊本が保存されている。<sup>16</sup> ここから、少なくとも文献目録の改訂版だけでも出したいと、彼が準備していたことがわかる。文献目録以外には、科学アカデミーの『報告集』とロイヤル・ソサエティの『フィロゾフィカル・トランザクション』から取られたヘルメス化学の作業方法の抜粋が掲載されている。これも便利なアンチョコであるが、ヘルメス哲学者と同列に現代の学者を扱うものとして、やはり書評子から厳しく批判されている。<sup>17</sup> なお、ラングレによる自筆の追加には、書誌的事実に関わるものだけでなく、薔薇十字会に対する風刺(III, 287)など興味深い価値判断もいくつかある。中でも、錬金術とキリスト教の関係について「ヘルメス哲学に理性的に賛成するにも反対するにもキリスト教以上の何かが必要である」(III, 210) という追加は面白い。何が必要なの

かは具体的に語られないが、書き込みとはいえ、カトリックの坊さんがキリスト教には錬金術は理解できないと語っていると取れるからである。その大胆さはいうまでもないが、彼が実はかなり錬金術に心酔していたことも考慮すると、この発言の背後にある彼の思想的な立場は何なのかが否応なく再問題化してくることになる。

第一巻の「前書き」で、ラングレは「社交人士は第一巻の歴史を手に取り、錬金術師は狂ったように第二巻に沈潜し、愛書家は第三巻のみを愛好するだろう」(I, x) と語る。今見てきたように、確かに巻ごとに内容が異なるし、対象とする読者も異なることをラングレが想定したとしてもおかしくはない。しかし、われわれにとってだけでなく、当時の読者にとっても、『ヘルメス哲学史』は完成度の低い首尾一貫しない乱雑な著作と映ったし、そう映るだけの矛盾や混乱を巻の内部でも巻の間でも有していた。錬金術師に対する辛辣な風刺の背後で本当は何がいたいのか、一方では錬金術を狂気の沙汰としながら、他方で錬金術師を狂喜させるものを提供するその真意はどこにあるのか。このような疑問がいやでも浮かんでこざるを得ない。既に70近いとはいえ、創作意欲は充実していたし、『歴史学研究の方法』といった優れた歴史学関係著作を次々と発表してきた人物が、どうしてこんな著作を発表したのだろうか。糊口のためにとにかく出版したという面もあろう。しかし、もっと本質的な理由、彼にとって「語られぬこと」でありながら、実は彼の言説をこのように規定した何かがあるのではなからうか。

ここに、彼のアイロニーが浮かび上がる。それは、仮説的にいえば、彼の著作を貫く次のような屈折した視点である。錬金術など時代遅れの狂気に他ならない、今や啓蒙の時代なのだ、だが、俺は錬金術を信じ、貧困から逃れようと日夜錬金の夢を追ってきた、それは俺の実益を兼ねた趣味であり、俺の生活の一部なのだ、狂気だからといってそう簡単にそれを捨てられようか、しかし、そんな狂気にいつまでもしがみついているとは。つまり、ラングレは、最年長の百科全書派として啓蒙という姿勢をフィロゾーフと共有しながら、その精神的ルーツを17世紀に置いているがゆえに、フィロゾーフのように過去や伝統から自由になれず、自虐的アイロニーを自己に対して向けざるを得ないのである。

だが、本当にそうしたアイロニーを有したのか。その点を厳密に論証するのは容易ではない。ただし、錬金術を狂気といいながら、彼が錬金術に傾倒したことはいろいろな箇所を示されている。例えば、パッシュォネイ枢機卿に宛てた死ぬ直前の手紙で彼は語る。

私は齢80を過ぎたが、医者など無用だった。というのも、医書をよく読んでいたので、そこから簡単な療法はすべて写し取り、それを自身のためかもしくは他人のために用いて、ほとんど常に効能があったからである。卒中に備えて私は常にそうした薬を持ち歩いている。<sup>18</sup>

彼の家には錬金術の実験に用いる器具や薬品も多数そろっており、それをを用いて日常的に実験を繰り返していた。それは彼の死後の財産目録からも窺えるし、『化学講義』に自ら行った多くの素人実験を臆面もなく付け足したことからわかる。<sup>19</sup> それに、『ヘルメス哲学史』中で展開された次のような叙述を証拠として掲げてもよいだろう。「孤独の中で彼 [シュネソス] は隣人なら

びに祖国に役立ちたいという欲望を保持していた」(I, 46)といった一部の錬金術師の有した公共性の称揚であり、「この教皇[ヨハネ22世]が死んだとき、彼の宝物庫には金が千八百万フロリン、宝石と聖杯が七百万あった」(I, 192)あるいは、「今世紀の初頭はドイツで実際に行われた金属変容によって輝いている」(II, 62)といった、錬金に成功したのを信じているかのような記述である。

それにも関わらず、彼は「前書き」で錬金術を「それを用いて錬金術師たちが不完全な金属を純粋で完全な金属に変換できると空想している狂った愚かな」(I, xiii)ものと見なし、その愚かさ加減を『ヘルメス哲学史』で叙述するのだという。やはりこれは、自己に向けられたアイロニー以外の何物でもない。あるいは、自らも騙されてきた錬金術師たちに対する恨み辛みか。

このアイロニカルな視点には書評子たちも大いに戸惑ったようで、『ヘルメス哲学史』への書評を寄せた三書評誌がそろって、著者の錬金術に対する態度の二面性に不満を呈している。<sup>20</sup>しかし、問題になっているのは、単なる二面性や矛盾ではない。読者の動向や時代の動向に敏感なラングレが錬金術の終焉を予知できなかったはずはないのだ。だから、そこに読み取るべきはやはり、終焉や崩壊を知っているがゆえのエイロネシアである。

それゆえ、『ヘルメス哲学史』はその題名にも関わらず、彼が『歴史学研究の方法』で提起したような歴史とはなり得なかった。そこに語られるのは、史料の検討や検証がされたとは思えないような、ヘルメス哲学者たちの伝承物語群の時代順の羅列でしかない。しかも、ヘルメス哲学者に錬金術師だけでなく、古代ではデモクリトス、近代ではボイル、ベッヒャー、シュタールといった人物まで含めるに及んで、『ヘルメス哲学史』はますます混乱の度合いを深めていった。しかし、成功した化学者とは異なる錬金術師の狂気と哀れな末路とは何か。ラングレ自らも語るようにそれは、なんとか自力で富を得ることで貧困から脱し、同時にその富で社会に役立とうとして、いわば伝統技術に賭け、その結果すっかり散財し一文無しとなり、今ではその伝統技術が欺瞞でしかなかったことを自覚している、自分のような過去の人間に対する鎮魂歌、悪くいえば、ファルスだ。そこには、確かに、わかっちゃいるけどやめられない式のアイロニーがある。

それゆえ、この『哲学史』は哲学史というよりも、むしろ悲喜劇的な物語と見た方がいい。ラングレ自身、歴史と小説の違いを認めた上で、小説の利点を次のように語る。「歴史は人間の悲惨さの肖像であるといわれる。それが私が歴史に見出す短所だ。それに対して、小説では悪い王様や専制君主は常にその罪が要求するように滅ぶ」<sup>21</sup>。だから、むしろヘルメス哲学小説という視角から『ヘルメス哲学史』に迫る方がこの物語はよく理解できる。事実、狂気の生んだ悲慘がテーマであることはラングレ自身が告白しているところである。

したがって、ヘーゲルにいわせれば「阿呆の画廊」に他ならないこの『哲学史』であるが、<sup>22</sup>それをラングレが展覧せしめたのは、ニュートン力学など新科学に関心を持ち始めた社交人士に、<sup>23</sup>錬金術なる過去の愚を笑うような物語を提供することにあつたと同時に、1740年代にディドロ、ルソー、コンディヤック、ダランベールなどなどといった新しいフィロゾーフ世代がまるで「賢者の行進」のように登場し、自分の世代を含めた過去の伝統や習慣、遺物を葬っていくこ

とへの、アイロニカルな対応でもあったのだ。

だが、同時代の書評誌も現代の研究者シュリダンもここに、『歴史学研究の方法』でせっかく提起した批評性の欠如や矛盾・混乱、完成度の低さのみを読み取る方向に傾きがちである。もちろんそれは間違っていない。しかし、重要なことは、そういう正攻法を取れずに、矛盾と撞着に満ちた悲喜劇に落ちつかざるを得なかったことの内実を抉ることだ。ラングレにはできなかったのだ。貧しい文士であるがゆえに錬金術に夢を追った不遇な自分の世代の生き様を全面的に否定することが、『百科全書』に項目「化学」を執筆したルエルの世代になれば、安んじて錬金術を批判し化学のポジティブな発展を展開することができよう。<sup>24</sup> 歴史や流行の変化に敏感なラングレは、フィロゾーフのように錬金術を狂気としつつも、その否定性の背後で自分あるいは自世代の存在をアイロニカルに訴えざるを得ないのだ。

### 哲学史の歴史の中で

フランスにおける哲学史記述は、古典的にはディオゲネス・ラエルチオスの『哲学者列伝』や、17世紀後半に成立し1711年のラテン語版で大陸に広まったイギリス人トーマス・スタンリーの『哲学史』などを共通の遺産としながら、18世紀前半の展開を進めていく。アンリ・ゴーチエ『哲学者文庫』(1723)、ビュリニ『異教哲学史』(1724)、ブロー＝デランド『批判的哲学史』(初版、1737)、ダランベール『百科全書序論』(1751)について、筆者は既に別に検討した。<sup>25</sup> それを要約的に示せば、スタンリーの哲学史が、対象をオリエントなどにも広げたいわば〈考証学的哲学史〉の頂点であるのに対し、デランドやダランベールのそれは古代から近代までの理性の自立的展開を示そうとする〈啓蒙的哲学史〉とも呼ぶべきものであり、その間に位置するゴーチエとビュリニは両段階の過渡的性格を示している。ゴーチエのものは自分が読んだ書物のノートや引用文の集成からなる〈辞書の哲学史〉あるいは〈文庫的哲学史〉であり、考証学がもたらした古代哲学の格言に近代自然学ノートが無造作に継ぎ足されている。そこでは古代哲学と近代自然学の両エレメントが統一されないまま共存し、哲学史の統一のエレメントが喪失するという、哲学史記述にとって危機的状態が示されている。と同時に、自然学と自然利用の精神は考証学を現実へと開くことで、そこに批判的折衷的精神という、〈啓蒙的哲学史〉へとつながるエレメントを準備してもいた。他方でビュリニは、やはり考証学を継承しながら、その対象を中国や南米など異教へと広げ、世界大の視野で〈世界自然神学誌〉として哲学史を展開してみせた。そこに理性や精神の自己展開の歴史としての〈啓蒙的哲学史〉はまだ見られないが、自然神学という枠組みで、神から半分自立した理性の、世界大の共通性・統一性は示された。理性を自然神学から解放し、それを時間化する〈啓蒙的哲学史〉まで、もう一步のところまで来ている。

こうした展開の中でラングレの『ヘルメス哲学史』はいかなる位置を占めるのか。ブラウン、ゲルー、サンチネッロらのように、これを全く無視しても、いやむしろ無視の方が、哲学史の歴史はすっきりとし、〈啓蒙的哲学史〉へ自然に進めるようだ。しかし、彼らは無視しても、『ヘルメス哲学史』は1742年に大部の哲学史の一部をなすはずの著作として現に出版されている。

その幻の哲学史もまた「阿呆の画廊」だったのかどうか、それはわからない。しかし、ラングレが『ヘルメス哲学史』なる「阿呆の画廊」を、デランドの『哲学史』の後に、そしてドイツでブルッカーが啓蒙主義的な『批判的哲学史』を刊行し始めるその年に出版していることは事実である。どうしてそんな破廉恥な行為にラングレは出たのか。そこには、何か今まで解明されなかった歴史的な意味があるように思われる。

もちろん問題は、「賢者の行進」=理性の自立的展開という哲学史の整序の後に残された、考証学の伝える伝記的事実の物語化・小説化を通じたファルスへの転換の哲学史史上の意味であり、歴史家にそうした裏面的ゴシップ的哲学史を書かせた意識構造の、哲学史史上の位置である。アイロニーの構造については既に分析した。ここでは、そこから生まれた理念なき哲学物語=「阿呆の画廊」をどう評価するかが残されている。これを単に否定的なものとしてヘーゲルのように一蹴するのは、われわれの取らないところであるし、本来ヘーゲルらしからぬ啓蒙主義的悟性的態度である。歴史を弁証法的に、あるいはむしろ、ある種の必然性において見ようとすれば、「阿呆の画廊」が、「賢者の行進」=理性あるいは人間精神の進歩としての哲学史=に同伴するものであることが見えてくるはずだからである。それは事実啓蒙主義の直前あるいはその裏面として登場した。というのも、そこには、自らの時代の終焉あるいは進歩史観の方向への転換を予感した近世人の、アイロニーが縫い込まれているからである。

それはいわば哲学史史上における「ラモーの甥」なのだ。ディドロの『ラモーの甥』については当のヘーゲルのものを初めとして多くの解釈があるが、「彼」=「ラモーの甥」が啓蒙の世紀を代表する「私」=「フィロゾーフ」の裏面であり、「私」が人間や歴史をポジティブに見るのに対して、「彼」がそれを徹底してネガティブに見て、それにアイロニカルに対すると解釈しても、特に異存はないだろう。ラングレ自身が「ラモーの甥」のような性格を一面で有し、寄食者的な生活を送っていたことは既に触れた。しかし、18世紀半ばになると、同じ文士たちの中で、フィロゾーフと寄食者との分裂がかなりはっきりとしたものになっていく。その分裂の結果成立したのが『ラモーの甥』であるが、そこに分裂以前の若きディドロの両面性が示されていることはよく指摘されている。ディドロは『百科全書』の監修者となることで自らをフィロゾーフとして造形することに成功したが、それでもなお、「ラモーの甥」という、過去の自分であると同時に自己の裏面でもある存在に敏感であらざるを得なかった。ラングレもまた自らをフィロゾーフへと造形しようとした。しかし、遅すぎたのだ。彼の中の「ラモーの甥」=「下賤な意識」は捨象できない自己のアイデンティティをなしており、確かにそれを別の自己がアイロニカルに眺めることはできるが、それを切り捨てて自立した理性的存在=カントの大人=になることはできないのだ。ラングレたちの世代にあっては、出版業やジャーナリズムを中心とするブルジョア社会の未成熟もあって、文士は自立したフィロゾーフとはなり得ず、フィロゾーフ性と寄食者性、傲慢さと卑屈さを合わせ持つ分裂した人格たらざるを得なかった。

若き文士が貴族などパトロンに対する自立性を次第に強め、自らをフィロゾーフと自覚するようになっていく渦中で、哲学史もまた<啓蒙的哲学史>へと自己を成形する。そのとき、博識性、

神秘性、寄食性、陰謀性といったものが捨象されていくが、まさにその最たるものであるヘルメス哲学をラングレはなぜか救い出す『ヘルメス哲学史』。しかもその救い出し方はアイロニーに満ちており、この作品自体が〈啓蒙的哲学史〉＝「私」に対する「ラモーの甥」たり得ている。事実、この作品についての一般的評価である矛盾・混乱・アイロニーとは「ラモーの甥」＝「分裂した意識」そのものの特徴ではなかったか。もちろん、『ヘルメス哲学史』は作品としての『ラモーの甥』ではない。ディドロの小説は18世紀社会そのものの分裂や矛盾を二人の人物の言動のうちに活写した傑作であり、ラングレの物語は〈啓蒙的哲学史〉の、単なるできの悪い裏面としての「阿呆」＝「ラモーの甥」でしかない。

ただ、「ラモーの甥」＝「阿呆の画廊」と見ることで、ヘーゲルの哲学史史の悟性性をヘーゲル自身において克服する方向性は獲得できる。ヘーゲルは『哲学史』の「序論」で、まるで啓蒙主義者が迷信に対するかのように、自分以前の哲学史を何の価値もないと一蹴した。<sup>26</sup>これがヘーゲルの標榜する弁証法とは無縁の態度であることはいうまでもないが、ヘーゲル研究者たちは不思議なことに、これを悟性的と批判して哲学史の歴史を再検討する労を取っては来なかった。しかし、哲学史史の扱いにおいてヘーゲルが、『精神現象学』で自らが批評した「私」＝啓蒙主義者の立場に立っていることは、これまでの説明から明らかであろう。<sup>27</sup>だから、問題は、『精神現象学』の視点をヘーゲルの哲学史史に回復することである。もちろん、批判的に。

振り返ってみれば、この節で筆者が行おうとしたのは、まさにそのことであった。もちろん現時点においてそれに十分成功したと筆者も思ってはいない。ただ、『ヘルメス哲学史』を哲学史の歴史上に位置づける作業を通じて、「阿呆の画廊」の歴史的意義も見えてきたのであり、それと「ラモーの甥」とを連関させて考察することで、18世紀哲学史の展開について新たな展望が拓け、同時に、ヘーゲルの哲学史史の見方の問題点とその克服の方向性が見えてきたとはいえよう。

## まとめにかえて

ラングレの生涯と業績を追うことで、日本ではあまり知られていない「ヨーロッパ精神の危機の時代」(P・アザール)における文士・寄食者たちの生き様が見えてきた。<sup>28</sup>そして、その世代と啓蒙の盛期のフィロゾーフとの世代ギャップも。そして、『ヘルメス哲学史』は、こうした世代ギャップとそれがもたらすアイロニーによって規定された作品だった。そして、その意味でこの作品全体を「ラモーの甥」という人物に比すことができた。といっても、道化としての魅力・迫力とも、『哲学史』は「ラモーの甥」にはるかに及ばない。それでも、〈啓蒙的哲学史〉勃興の時代にこの「阿呆の画廊」が書かれたことで、ヘーゲルの哲学史史を見直す機会が与えられた。確かに、ヘーゲルのいうように「現実的なものは理性的」なのだ。そのことの含意を、「阿呆の画廊」についてもわれわれはよく玩味する必要がある。

なお、今までものした拙稿で筆者は、折に触れ、啓蒙時代の特徴として、異教や異文化を通じた自己相対化とより高次の普遍性への志向を取り上げてきた。しかし、『ヘルメス哲学史』にはこの面では見るべきものがない。中国、アフリカ、アメリカのヘルメス哲学も扱われるが、分量

も少なくほとんど内容がないからである。だが、逆に、その否定性ゆえの存在意義をここでも有しているのかも知れない。<sup>29</sup>

いずれにせよ、世紀前半についての見通しが得られて、いよいよわれわれの〈18世紀フランスの哲学史の歴史〉も佳境に入ってきた。次は、世紀後半へと考察を進める中で、〈啓蒙的哲学史〉の諸ヴァリエーションとその現実性と可能性を探ることへと歩を進めねばならない。

## 注

- \* 本研究は平成八年度文部省科学研究費基礎研究（C）2によってなされた研究成果の一部である。
- 1 Lucien Braun, *Histoire de l'histoire de la philosophie*, Paris, 1973; Martial Gueroult, *Histoire de l'histoire de la philosophie*, Paris, 1984-1988, 3 vol.; *Storia delle storie generali della filosofia*, a cura di Giovanni Santinello, 2. *Dall'eta cartesiana a Brucker*, Editrice La Scuola, Brescia, 1979.
  - 2 「この試論を私は、自分が長いこと尽力してきた大著の先触れといってもいいのではないか」（I, iv）。なお、Lenglet Dufresnoy, *Histoire de la philosophie hermétique*, Paris, 1742からの引用については、このように、（ ）内に巻数とページ数を併記する形で示すことにする。なお、ラングレの名前の表記については、du Fresnoy も行われているが、拙稿では注3のシェリダンの表記に従った。
  - 3 Geraldine Sheridan, *Nicolas Lenglet Dufresnoy and the literary underworld of the ancien regime*, The Voltaire Foundation, 1989. この研究は、付録にあるラングレの自著と編著の精細な文献目録を見てもわかるように、ラングレの残した微かな痕跡を第三者の手稿や手紙などを含めて虱潰しに調べ上げて書かれた、ラングレについてのこれ以上はできないと思われるほどの念の入った研究であり、伝記としても非常に優れている。
  - 4 Voir, *Ibid.*, p. 50-59 et 97-109.
  - 5 Lenglet Dufresnoy, *Méthode pour étudier l'histoire*, Paris, 1729, p. 2-3
  - 6 *Ibid.*, p. 3.
  - 7 ブーランヴィリエは『世界史綱要』で「私は奇跡を、天地創造や洪水の奇跡までも、自然哲学がわれわれに与える観念と和解させようと努めるだろう」（B. N. f. fr. 6363, p. 3）と語るが、これが『歴史学研究の方法』の29年版の主調ともなっていく。
  - 8 Voir, *Tables chronologiques de l'histoire universelle*, Paris, 1741. なお、この年表でも一応旧約聖書が紀元前の年代測定の基準として用いられている。しかし、それは、ヘブライ、70人訳、サマリアという、旧約聖書の年代測定をめぐって当時対立していた三つの暦の並列によって示されることで、既に相対化され、エジプトや中国の俗史と並ぶことで世俗化されてもいる。また、ほとんどがヨーロッパに割られているように、「世界史」を標榜しながら、実際はヨーロッパ史でしかない。
  - 9 Voir, *Mémoires de Trévoux*, 1729, p. 1987-2020.
  - 10 *Ibid.*, 1731, p. 912.
  - 11 ヴォルテールについては『習俗論』、モンテスキューについては『法の精神』、『百科全書』についてはグランベールの「序論」など参照。
  - 12 Voir, *Le Philosophe*, Texts and Interpretation, ed. by Herbert Dieckmann, Saint Louis, 1948.
  - 13 そうした物語性をもっともよく現れたのが、ミカエル・センディヴォギウス（1566-1646）を扱った43-45節（I, 322-369）である。ザクセンの選帝侯に捕らえられて「哲学者の石」の秘密をいうように拷問にかけられた錬金術師コスモポリット（アレクサンダー・セトンの仮名）を、センディヴォギウスが計略を用いて救出す顛末を中心に、それを自作の一部として冒険小説のように物語るだけでなく（第43節）、その典拠となった、ポーランド王ウラディスラスの王妃秘書デノワイエの1651年6月12日付の

- 「手紙」(第44節、仏語)と「かつて彼の弁護士であったあるドイツ人の描くポーランドの男爵センディヴォギウスの生涯」(第45節、羅仏対訳)という、これまた冒険仕立ての作品を、編者としても紹介している。ここには、作者ならびに編者として読者の喜びそうな稀覯本や珍妙な物語を紹介しようとするラングレのサービス精神とともに、重複や乱雑といった彼らしさも現れている。
- 14 なお、この点について詳しくは「ラングレのやり方の全面的に恣意的な性質」(Sheridan, o.c., p.122)を論じた箇所など参照。
- 15 『ヘルメス哲学史』は三つの書評誌、すなわち、*Bibliothèque raisonnée des ouvrages des sçavans de l'Europe*、*Observations sur les écrits modernes*、*Bibliothèque Française*に取り上げられ、概して評判はよくないが、啓蒙の世紀らしく、ラングレがこの論文を掲載したことは高く評価されている。例えば、*Observations*は「この三巻本で最良のものは、科学アカデミーの1722年の『報告集』から取られたジョフロワ氏の作品である。そこで、このアカデミー学者は、金属を変容し銀や金を作る秘密を知っていると主張する輩が皆詐欺師だということを示している」(XXVIII, Paris, 1742, p.192)と評価している。
- 16 B.N. Res. R2512。出版地や出版年などに関する部分的修正だけでなく、かなりの書誌について付箋が付けられて、著書名のアルファベット順に合うように、場所の変更が指示されている。
- 17 *Observations*の次のような評言を参照、「だから、このように、レムリ、レオミュール、ブルデュク、ジョフロワ、デュアメル、エロ、ブルハーヴェがヘルメス哲学者にされてしまうことになる」(XXVIII, Paris, 1742)。
- 18 Vat. Lat. 9813, f.63-70 (Sheridan, o.c., p.239).
- 19 Voir, Sheridan, o.c., p.239-240 et 266.
- 20 Voir, *Bibliothèque raisonnée*, XXIX, 1742, Amsterdam, p.52; *Observations*, XXVIII, Paris, 1742, p.191; *Bibliothèque Française*, XXXVI, 1743, Amsterdam, p.100.
- 21 *De l'usage des romans*, i, p.81-82 (Sheridan, o.c., p.144).
- 22 グロクナー版の『ヘーゲル全集』に依拠した長谷川宏訳では「おろかさの回廊」(『ヘーゲル哲学史講義』上巻、河出書房新社、1992年、17頁)となっており、訳語としてはこちらの方が適切と思われるが、本稿では巻間に流布した岩波の『ヘーゲル全集』の訳にしたがって「阿呆の画廊」としておく。
- 23 1730年代に力学をめぐるフランスの科学アカデミーではニュートンかデカルトかの論争が展開され、モーペルチュイラのラップランド遠征と地球の形状の測量などの結果、40年代にはおおむねニュートンが勝利を収めた。また、在野ではヴォルテールがシャトレ夫人の援助も受けながら『ニュートン哲学原理』を1737年に発表してニュートンのフランスへの導入に影響力を発揮した。こうして、力学が当時の社交界の重要な話題となっていた。
- 24 Voir, *Encyclopédie*, III, 1753, art. *chimie*.
- 25 「スタンリー『哲学史』試論—十七世紀考証学的哲学史の歴史的位置付けのために—」『人文社会研究』(名古屋市立大学教養部紀要)第37号(1992年3月)、139-158頁;「エンジニア、哲学史、百科全書的精神—ゴーチエ『哲学者文庫』をめぐる—」『人文社会研究』第39号(1994年3月)、61-78頁;「ビュリニ『異教哲学史』—一八世紀前半の自然神学から異教へ—」『人文社会研究』第38号(1993年3月)、227-246頁;「十八世紀前半の理性—ブロー＝デラント『批判的哲学史』をめぐる—」『一橋論叢』第97巻第5号(1987年5月)、54-74頁;「エピステモロギ、グランベール」『一橋論叢』第99巻第6号(1988年6月)、80-100頁。
- 26 『ヘーゲル哲学史講義』上巻、17頁以下ならびに105頁以下参照。ただし、ヘーゲルが「哲学史上のどの哲学も必然的なものであったし、いまなお必然的なものであり、したがって、どれ一つとして没落することなく、すべてが一全体の要素として哲学のうちに保存されている」(40頁)という見方をしていることは注意に値する。というのも、筆者がヘーゲルに求めるのは上の引用の「哲学」を「哲学史」に「哲学史」を「哲学史」に読み替えることだからである。

- 27 もちろん、「私」＝デイドロなのだから、この登場人物を単純な啓蒙主義者と見ることはできない。ここでは、あくまでも、ヘーゲルの解釈する「私」が問題であることを念のため注記しておく。
- 28 「危機の時代」について一言。筆者はアザールのようにそれを1685年から1715年までの30年という短期間に限定するつもりはない。とりわけフランスでは、この時期の終わりをもっと遅らせ、変化もまた緩やかなものにする必要があると思われる。
- 29 例えば、ヘルメス哲学という狂気がヨーロッパだけでなくすべての民族のものであることを論じた箇所（I, 440 et suiv.）などを参照。ここには、19世紀以降明確になるヨーロッパ＝文明、他の地域＝野蛮、半開といった図式と異なり、どこもかしこも愚かだというアイロニーがある。